

中等教育における特別活動の方法に関する一考察

— WandervogelとBoy Scoutsの比較から —

鈴木 孝*・菊 入 三樹夫**

(平成元年9月25日受理)

ein Betracht von der Methode der Außerlehrfachtigkeit
in Mittelschulbildung

— vom Vergleich in Wandervogel und Boy Scouts —

Takashi Suzuki u. Mikio Kikuri

(Received September 30, 1989)

はじめに

学校と社会は密接に結びついているので、国情により学校のあり方は大きく異なる。学校教育への期待、社会における学校の位置づけ、伝統などにより学校教育の内容はかなり異なるものとなる。西欧諸国と我が国の学校教育の間にも多くの相違点が存在する。これから考察する特別活動に至っては、とりわけ事情が異なる。西欧諸国の学校では多少の差異はあるにせよ、あくまでも教科中心であり、我が国の学習指導要領に記述されているような特別活動はほとんど顧慮されていない。註(1)

伝統的に教科中心の西欧の学校教育の中で、ドイツのWandervogel運動と英国のBoy Scouts運動は常に特異な地位を占めてきた。両者とも主に中等学校生徒の活動として、後世青少年活動に大きな影響を与えたばかりでなく、今日の学校教育における特別活動のあり方にも、重要な問題を投げかけている。

「望ましい集団活動を通じて、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員として、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う(高等学校学習指導要領平成元年版)」ことを目標として重視する我が国の事情のもとで、クラブ活動など特別活動に直接影響を与えたこの2つの活動の再吟味することにより、特別活動の意義や、陥りやすい問題点をより明確にしたいと考えている。

[I] Wandervogel 運動

* 教育哲学研究室

** 附属女子高等学校

Wandervogelとは19世紀末ドイツに、ベルリン郊外のある高等中学校(Gymnasium)で始った、ハイキング(Wandern)・Campingを中心とした生徒の自発課外活動から出発し、数年のうちにまたたく間にドイツ・オーストリアの中等学校に波及し、社会的にも大きな影響を与えたものである。この発生時(1896)から十数年間の初期Wandervogel運動を年表にそって要約すれば次のようになる。註(2)

この運動はもともと今日の「同好会」的な、同じ関心を持つ有志の生徒とその意義を認める積極的な教師により、自発的な企画から誕生した。最初の地域近辺の小ハイキングから徐々に企画を発展させていき、その過程で団員数も増加させていった。しかし、団員数の増大は関心の多様化を必然的に生み出すことになる。その過程で学校の枠を越え、また教員や顧問の指導下から脱するようになると、活動方針をめぐり1904年、最初の分裂がおこった。しかも当時盛んになりつつあった青年運動の側面も持ち始め、その後離合集散を繰り返すことになる。

Wandervogelの各団体は他の青年運動と相互に影響を与えあいながら、1912年Deutsche Jugendwandernbundへとまとめられていった。そして国家の後援で活動する別の青年団体との対立をもちながら、大学Freischarや国民教育者協会などとともに、多くのグループは自由青年団に結集し、ついにその年の10月にはKassel近郊のMeissner山において青年の祭典を自催し(Hohe Meissnerfest)、広く世間の耳目を集めるに至った。だが1914年第一次世界大戦が勃発し、動員体制が敷かれると、Wandervogel諸団体を始め、多くの青年運動団体は自由な活動を停止して、その歴史的な役割を終えるのである。

ちなみに第一次大戦後もWandervogelの運動は再開されるが、青年同盟(いわゆるBund)と同様に民族主義の色調が濃厚になってしまうので、ここではとり上げない。またWandervogelはナチ時代のHitlerjugendとも厳密に区別せねばならない。後者はナチ体制強化の目的から、ナチイデオロギーや軍隊式団体生活になじませるための官製団体であり、(そのためあらゆる青年運動団体は、民族主義・国家主義的な傾向を有するものも含めて解散させられることになる)指導・指揮はナチの成人が行っていたのに比べ、前者はあくまでも自発的・自律的な団体であったからである。またWandervogelにあっては、たとえ人望のある年長者でも、一定の年齢を越えれば退団することになっていた。

次に初期Wandervogelの主な流れを見ることにする。先に活動方針をめぐる離合を繰り返したと記したが、山野を抜渉しCampingを行なう活動とはいっても、いろいろな視点からの活動が存在した。例えば、ドイツの古謡を発掘・収集したり、ロマン主義的な雰囲気の中でドイツ民族の歴史に思いを馳せるグループ(Zupfgeigenhansl)や、耐乏生活に積極的に挑むTurnwandler、Nietzscheの書名を自からのグループ名とするFroehliche Wissenschaft、Boy Scoutsを模したPfadfinderbund;それからあくまでもWandernに徹し、発足時の精神に忠実であろうとしたグループ(通常Altwandervogel、彼らは先述の1912年の統合にも、Hohe Meissnerfestにも参加しなかった)などが存在し、その他にも地域的に分派するグループも存在した。

このように学校の枠を越えながら、多様な活動へと膨張していったWandervogelではあるが、それでも総体として多くの共通の特徴を有している。まず第一に、WandervogelはGymnasiumを初めとした中等学校生徒の自発的な課外活動であったことであり、次第に膨張し変質していったのだが、発足時のSteglitz Gymnasiumでの組織や活動は、今日我が国の高等学校や中学校のクラブ活動とさほどかわらないものであった。また、華美な服装・豪華な装備は用いず、質素な食事をとり、交通機関も最少限の利用に留めるなど、儉約の精神に徹する活動を行った。(今日の団体ツーリズムや学生・生徒のクラブ合宿とも発想において異なる)そしてこれが目的でもあったのだが、自然に親しみCampfireを囲んで民謡を唱ったり、議論をしたりして、テント生活・自炊の中で団員の連帯感を深めたことであった。そのため

入団に際しては、当時流行のGeorge的な「尊敬・信頼・服従」を誓い、年齢の差をこえてdu(親称)で呼びあう習慣も培っていった。

こうした内容の活動を支える上で、重要なモメントとなっていたのが「ドイツ民族」という概念であったことも忘れてはならない点である。単なる自然にではなく、ドイツ的自然に分け入り、ゲルマン民族の伝唱を念頭におく民族性重視の傾向を、多かれ少なかれ分有していた。註③ 先述の質素・儉約といった個人の美德とも関連するが、原初回帰的・反都会的で物質主義的な世相に反対する傾向にあった。民族の健康の讚美や性の抑制とスポーツ奨励、反アルコール・ニコチン運動といった公德心や道徳性の向上といった倫理性を求めたのも、ドイツ民族の概念と軌を一にしているものである。

初期Wandervogelを通覧してその諸特質をまとめてみると、我が国の今日の特別活動(Gymnasiumの生徒は12~19歳)に示唆を与えることがらが多く見出せる。ここでは中等教育における特別活動を念頭におき、いくつかの点について論ずることにしたい。

まず第一にクラブ活動において、指導者は活動の目的をどう設定し、何を生徒にどこまで要求し、何を与えていくかなどを明確にしておく必要がある。また学校教育における位置づけも明確にできるようにし、保護者や地域社会の理解を得ることも、特に新規の活動においては重要である。Wandervogelの発足にあたって、指導者となったHofmann(のちFischer)らは、まず校長の了解を得るだけに留めず、当時としては大変ユニークであったが、保護者顧問会議を組織し、活動に対する理解を保護者に求めていった。後には対外面のトラブルも、この保護者集団が活動の擁護のために積極的に前面に立ったこともあった。だがその一方で、生徒の活動に対する外部から口出しや介入は認めなかった。かかる前提立って、生徒間の自発性も保障したのである。

活動の過程で形成される生徒間の秩序については、当時のドイツの中等学校生徒の持つ健全なモラル感覚が育成されることになった。活動が広範化してくると、女子Wandervogelの加入もみられるようになったが、今日の観点からすれば注目されるが、いわゆる不純交友は問題になっていない。それは、活動での役割の自覚や仕事の分担といった根本的な事柄が、団員には自明となっていたばかりでなく、Wandervogelは交友を深めることが第一の目的なのではないということが、常に自覚され

ていたためである。団員生徒がこういったモラル感覚を持つのに成功したのは、Fischerらの卓越した指導力によるばかりでなく、当時の社会問題でもあった改革・矯風運動（反アルコール・ニコチン、性病撲滅、自然愛護など）も活動のエネルギー源となっていたことも見逃がせない。

だが他方、活動の一貫した継続性の点については、特別活動の観点から考察すると、検討すべき点も多く含んでいる。もともと企画者Hofmannが数年で活動から離脱し、Wandervogelの基本性格を決定づけた後継者Fischerも引退すると、活動の裾野は広がったものの、統一した運動体としての継続性が徐々に希薄になり、青年運動の側面が目立ってきた。Wandervogelは当初、課外活動として人間の内面性を陶冶する(Weg nach innen)のが目標であった。しかし、冷静に活動の流れを見渡してアドバイスする、影響力を持った指導者がいなくなると、種々の方針が乱立して、今日学生・生徒の間でブームとも言える同好会的なものへと変質していった。中には民族主義運動と髪一重といったグループも出現するに至った。

〔II〕 Boy Scouts 運動

ボーイスカウトはイギリスのBaden Powell (1857～1941) 郷が軍務に服していた頃の経験をもとに彼が強い意味をみだしていたScouting (斥候) 活動にヒントを得たものという。1909年の第1回Jamboree (ボーイスカウト世界大会で4年に1度ひられる) から現在まで拡大の一途をたどっている。今や、世界のBoy Scouts人口は1500万人という。一体、なにをどのように指向している活動団体であるのか考察に価しよう。

もともと、将軍としてのPowellがボーア戦争(1899～1902)に従軍中にScouting活動の重要性を一冊子にまとめた。それを本国で発行したものが後に活動の起点となった。“Aids to Scouting”この冊子は、たちまち全英の少年の心をとらえ、国民的英雄Powellの“Aids to Scouting”の反響があまりに強いので、Powellは少年のありかたとScoutingをあらためて考えざるを得なくなったのである。そして、それがBoy Scoutsになっていく。

つまり「もし軍隊的要素を排除したもので、しかしこれと同じ方針にもとづいて何らかの訓練法を工夫するならば教育の目的に役立つことは十分可能だ」というので

ある。註(5) その当時すでにローカルに存在していたイギリスのBoys BrigadeやアメリカのRed Indian Boys (動物記の著者シートンの設立による少年団)などが参考にされた。このようにしてBoy Scoutsはなにより、当時の世相を救う少年指導対策として発足したのである。つまり、1905年前後のイギリス社会は失業者の増加、貧困、非行少年、無気力な若もので崩壊したローマの如く公民精神の欠けた不安定な社会にあったという。

PowellのScoutingのアイデアは一躍、少年の夢をかきたてたといつてよからう。「野外で生活し、自分で畜殺し、料理し、あるいは未知の土地で道を発見し、自分の健康を自分で処理し、動物の通り道をよく知り、それに、豊富な一般的戦略や独立独行の精神を持つような能力」註(6)がスカウティング活動を代表する価値内容といえよう。その活動内容は次の如くである。1.訓練(自己訓練、スカウトのおきてへの服従など)2.観察(こまかく気づく、追跡、距離や高さの判読など)3.ウッドクラフト(キャンピング、料理、水泳、大工、サイクリング天文など)4.健康と忍耐(体力増強、訓練とゲーム、清潔、禁煙、自制、節制など)5.騎士道の精神(婦女子に対する礼節と助力、慈善など)6.愛国心、7.生命の救助(傷病に関する仕事、火災、ガス中毒、溺水など)

以上のスカウトクラフト(斥候技術)の内容がゲーム的、テスト的にキャンプなどで行なわれるのが活動の根本精神である。少年たちへのスカウト活動はやがて、将来、兵としての活躍につながるものだからという考えはPowell自身ごく初期にはあったようである。また、以後、軍隊的という批判に譴責されることにもなった。しかし、以後それは極力おさえられているのも事実である。ともかく、本論ではボーイスカウトの意味内容をたどり、その現代日本の教育の次元との関連の可能性を繙かんとするものである。

前述の1～6のスカウト精神なるものは平和であろうと戦争であろうと最良の公民をつくりあげるものとPowellは信じている。当時、彼は青少年教育に3つの不足を見つけだし強い不安を抱いていた。①立派な公民への男性的資質の不足、②既設の少年への組織体の魅力不足、③少年達の興味を永続させさせる斬新さの不足である。そこで、PowellはScoutingという少年にとって魅力的な言葉を使って新しい公民教育を目指したのである。

まず実験として、ブラウンシー島のスカウト訓練キャ

ンプが1907年の夏におこなわれる。1908年には前述の“Scouting for Boys”なる冊子は10万を越え、イギリス少年の心を強く捕えてしまったという。Powellは冊子の序文にていう。「この本は少年に如何にして生くべきかを教えようとしているもので、どうしたら食っていくかを狙ったものではない。いままでの学校教育は少年に如何すればよい成績が得られるか、どうすれば物識りになれるかという事だけを教え込み、そうして、又は権勢が得られるようにとしか考えていない。…略…ボーイスカウト訓練法の目的は『自分本位』の代りに『社会奉仕の観念』を値え、精神も身体も共に公に奉じ得るよう各人の能力を鍛えるのである。とくに、この訓練法には軍事的目的又は実修は含まない。」註(7)

いよいよ軌道に乗ったスカウト運動は“Scouting for Boys”の冊子とあいまって、イギリスの多数の少年が入部することになる。これこそ新しい社会教育運動であり、当然、タイムズ等のマスコミもこの運動をとりあげたがっていたようである。一般にこの運動をおこしたのはPowellであり組織をもちあげたのは少年達であるという。1910年（明43年）のスカウト人口は12万3980という。（女子のスカウトGirl Guideもこの年にすでに設けられている）さらにアメリカでもシートンを初代総長としてボーイスカウトアメリカ連盟が生まれた。1913年には30万人の団員をかかえる。オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、フランス、ドイツなど世界15の国々の参加する団体に成長した。註(8)

かくして1920年、ロンドンのオリンピア33カ国8000名のスカウト参加のもとで第1回Jamboree（世界大会）が開かれることになる。「ジャンボリーはつばの広い帽子をかぶり愉快に笑う少年たち（彼らは働きものの着るシャツと半ズボン、杖、スカーフで軽快な服装をしている）の歡喜にみちた元気はつつたたる集まりということになる。」このときのJamboreeの内容は次の如くである。スカウト車の組み立てと分解および利用法、消防、宙返り、モーリス踊り、体練、体操、救急作業、架橋、etc.である。この大会を終えてPowellはいう。「われわれ参加者のうち一人として現代の不安と疑惑の時代に各国の大人や青年が、世界平和のため一つの共通の理念を胸に抱いて、相互理解と平和な兄弟愛に結ばれた兄弟として集いたったことは、期待と希望に満ちた将来を約束するものと感じずにはおれない」。註(9) このようにして現在は第16回のJamuoreeをむかえるにいたっている。

日本もこの世界的活動に敏感に反応を示した。1922年に第1回全国少年大会が開かれて20の道府県より関係者123名が参加している。日本でもこの運動は少年に自主独立、自治精神、社会奉仕の念を体得せしめるものであったという。註(10) 連盟は国家的規模であって、ボーイスカウト総裁は後藤新平、副理事長は三島通庸という陣容である。

さて、1925年（昭20）に民主教育のスタートがきられることになる。昭22年に米軍の諮問委員も加わってスカウト規定が作成された。まず、有名なスカウトのちかいは次の如くである。一、神（仏）と国とに誠を尽し、“おきて”を守ります。一、いつも、他の人々を援けます。一、体を強くし、心をすこやかに、徳を養います。註(11) スカウトの“おきて”は、誠実さ、相手への義務としての忠節さ、人への奉仕、友誼、礼儀、親切、従順、快活、質素、友敢、純潔、信仰心などである。組織としては、まず、年少者より成るBeaver Scouts, Cub Scouts, 中学生にはBoy Scouts, Senior Scoutsがあり、その上に年長のVenture Scoutsと5種に大別されよう。1951年には日本もガールスカウトを含めて組織は固着し、その年のスカウト人口は3万4000、世界の人口は556万人になった。1971年には世界Jamboreeが日本で開かれている。このときの参加者は87カ国、本部奉仕者2000参加人員2万3758名とある。さらに、スカウト活動は現在、24万の団員を持つにいたっているという。

現在、日本で使用されているシニアスカウトハンドブックをみてみよう。まず、「ちかい」が目に入る。（前掲）

シニアの求められる活動内容は次のようである。「身体をきたえる、野外活動を行う、自分の将来をみつめ適性を知る。いろいろな経験を積極的に積む、社会の一員としての訓練を積んでいく、スカウト精神と技能をみがき奉仕活動を行う」註(12)などである。シニアをグループで活動させて社会感覚を修得するというこの態度は現在の学校教育を考えるうえで意味深い示唆を与える可能性を持つのではなからうか。

ボーイスカウト活動の特質はつぎの4点になろう。

- (1) スカウティングは青少年の自発的若いエネルギーの発散の場である。

まず自分の班（約6名）は自分たちがなにをやりたいかを討議する。とくに、シニアスカウティングでは自分たちの創意工夫が大きな魅力である。自分たちの企画立案

が最も重視される。内容は屋外の森林キャンプ（ウッドクラフト）から室内の教養活動まで多岐にわたる（植樹、施設訪問、進学や就職についての集会、キャンプ地調査、キャンポリーでの奉仕活動、新聞発行、ガールスカウトや他団体との交歓会、ウィンタープログラム、50キロハイキング、水泳訓練、郷土史の研究など）

(2) 集団のなかで自分を開発していく。

自分が喜び、悲しみ、悩みなどを共に理解しあえる友人がいたらどんなに素敵であるか、それをスカウト活動は満たしてくれる。まず、班の仲間での自分の役割りを果たすことから始まる。チームでの仕事は責任をもって分担し信頼を得るようにする。はにかみ屋は自信をつけることもできよう。自分の個性や相手への思いやりも身につくであろう。互いに思いやりの気持を持てるのなら一生の友となろう。

(3) 自然愛護

20世紀初期のイギリスは繁栄したが都市の労働者は貧しくて、子どもたちはひどい状態にあったという。このままでは国家の未来とか可能性が期待できない。そこで、Powellは自然によって肉体的精神的に健やかな人びとを期さねばならぬとしたのである。自然での生活（ウッドクラフトなど）はレンガとばい煙の町の生活から得られない健康と幸福をとりもどせるのだというのである。さて、さらに自然をどう考えるかはスカウト上級者への昇進の重要な項目となっている。

つまり、上級への昇級審査項目に「自然愛護章」がもうけられている。それは自然を識り愛する態度である。自然への認識、野外活動と自然保護（樹木や動物の愛護、表土や水を大切に、キャンプサイトを清潔に火に注意するなど）であり、さらに、公害発生や大気や土壌の汚染、農薬害やその他生活環境を見守る態度が要求されている。

さて、シニアスカウトたちにできる自然愛護は次の如き例が示されている。緑をふやす、小鳥の巣箱をかける。小川や池を守る、野草の種子を播く、雑草や害虫をしらべる。（現在、マツノマダラカミキリなどによる松の被害は目を覆うものがある）

(4) スカウティングと宗教

スカウトのちかいは前述のように3項目よりなっていた。その第1の項目は神（仏）と国とに誠をつくしおきてを守ります、であった。スカウトは根底に宗教的感覚を持つことが要請されている。英国の連盟本部の表現はto do my duty to Godである。この場合、dutyと

も権利への義務ではない。絶対的なものへの「つとめ」である。身近かに大自然の恵みや社会に対する感謝の気持ちを持つ、この感謝の気持は愛と善意につながるものと解されるのである。この愛と善意こそ神の恵みである。私たちは幸福を求め、人を愛し、いたわりあい人生を努力していくがそれは慈善や奉仕につながり、敬虔な信仰心が生まれていくと考える。註(3)

以上の4点がスカウト活動を支えるものといえよう。

ここで、規点を現代社会にむけてみよう。現代のイギリスの若ものの悩みをみると、その80%が容姿に悩み、77%が金銭に、62%が仕事に、60%が親の自分たちへの扱いかたに悩んでいるとある。とくに17才ともなれば85%がアルコールを飲み、あげくのはてはケンカ、セックス、ポリス問題と結びついてしまう。なかでも、drug abuseを試みている若ものは半に達しているという。註(4) このような現状は欧米に共通していよう。いつの時代も問題はあろうが、Powellの時代と較べて現代の若ものがとりわけ優れた教育環境にあるとはいえないであろう。日本でも繁栄する社会のなかで青少年へのヒズミは大きい。

たとえば、小中学校の学校ばなれをどうするか。（小中で4万人ちかい登校拒否がいる）、10万を超える高校中退者がいる教育環境をどう考えるのか、その他各種の不適應形態（いじめ、暴力非行、自殺など）をのりきるためには学校、家庭、社会の全体的協力形態あってこそ、より好ましい効果があげられよう。

その意味で、学校と社会を結ぶものとしてボーイスカウトをとりあげ、前章とあいまって教科外活動へのヒントを期してその経緯を記した。

〔Ⅲ〕 考 察

中等教育において、人間教育の充実という観点から、特別活動は近年重視されるようになった。註(5)それは核家族化など社会構造の変動による人間関係の希薄化や孤立化に伴い、少年犯罪や学校ぎらいの多出化の傾向があり（P.35,36,158）、中学校にあっては「生徒相互のいじめ、校内暴力……など様々な問題行動が、10年くらい前から急増し、我が国の社会的重大問題となってきている（P.36）」ことから、「自主的な実践の態度をやしない、望ましい人間関係や集団の確立（P.92）」するために、クラブ活動や学校行事を自覚的に遂行することの重要性が再重要視されているからである。

今時改訂の指導要領における学校行事の要旨には「集

団生活への適応、自然との触れ合い、奉仕や勤労の精神の涵養などにかかわる体験的な活動を一層充実する観点から……位置付けや内容の取扱いを明確にする(P.196)」と強化されているが、これはBoy Scouts活動の現実と概ね重複するものである。それゆえ学校教育における特別活動の考察にあたっては、WandervogelやBoy Scoutsの軌跡をたどり、比較検討することが特別活動の円滑な遂行にも寄与することになる。Wandervogelはいわば失敗した活動であり、Boy Scoutsは今日ますます青少年を惹きつけている。この差異の原因は前述した内にあるが、いま一步詳細に検討すれば、運動形成面やその他にもかなり問題を含んでいる。

Boy Scouts と Wandervogel の主な相違

	Boy Scouts	Wandervogel
指 導 者	権威ある軍人	教員と生徒OB
指 導 理 念	明確(青少年育成)	抽象的・曖昧
組 織	明確(加入する)	不明確(形成する)
活 動	冒険的・探究的	民族・民俗的
団員の関係	練度による昇進制	先輩・後輩
愛 国 心	公民的(神を敬う)	民族主義的
社会活動	奉仕・防災・自然 愛護	なし

特別活動改訂の要旨の第1で記載された(P.33)生命尊重や他人を思いやる心、自からの意思で社会規範を守る態度、自制・自律の心といった基本的態度は、これを支える精神としてDurkheimが道徳の三つの本質的な要素として明言している。

- ①規律の精神 esprit de discipline
- ②集団への愛着 L'attachement au groupe
- ③意志の自律 L'autonomie de la volonté

だがこれをどう実現するかという本質的な方法論や、集団内に形成されがちな informal group をどう廃除するか、指導者がどこまで、どのようにイニシアチブを発揮していくといった実践面での問題などについても、Wandervogel と Boy Scouts の指較研究が大きな示唆を与えるものと思われる。註(16)

註

- (1) 西独の場合、我が国の特別活動に相当するものは基本的に行なわれない。クラブ活動は通常行なわれない

が、卒業式などの儀式的行事や文化祭等の学芸的行事、運動会や朝礼もない。我が国とやや似ているものに旅行的行事と生徒会活動があるが、Gymnasiumでの長期の見学旅行と我が国の修学旅行とは、形態・内容共かなり異なる。また生徒会も協議会というべきであり、生徒の代表者として教員・保護者の代表と、学校運営に関する問題を協議することが中心となっている。

- (2) 第一次世界大戦後の活動はナショナリズムを強調するようになるので、特別活動の論題としてはかなり異質になる。よってここではとり上げない。
- (3) voelkisch であるがロマン主義の影響を受けたもので、政治イデオロギーの概念とは厳密には異なる。Wandervogel のOBは1919年のドイツ革命時には左右両陣営に見られた。だがドイツの中等学校ではJahn の体操連盟やRiehl の民族社会学の影響は大であった。世紀転換期には民族思想家LagardeやLangbehn また Avenaliusらが青少年を惹きつけていた。Wandervogel の生徒の理想像は中世以来のBachant (遍歴学生) であり、Bund 生徒が理想とした野心的な騎士団・軍人とは異なる。

また、この世紀転換期は名望家的市民主義の時代から、産業社会へと社会構造が激変した時代でもあった。急激な都市化・大衆社会化による旧来の社会秩序の崩壊は、若年層の多様な運動を生み出すことになった。例えば芸術分野におけるJugendstyl や分離派、表現主義、物質主義的な風潮に対する菜食主義・反アルコール、新しき村のようなコロニー運動など。教育分野においてはComenins 協会やR・Steiner サークルの活動、Wienecken の青年文化運動やHaeckel主義の団体、倫理文化協会などが活動していた。

- (4) 今日の西独でも課外活動は行なわないのが原則である。下記の理由が考えられる。
 - 1) 学校が半日制であり、生徒はすぐ帰宅する。また多くの宿題が課される。
 - 2) 中等教育が複線化されており、同世代でも関心の同一の者が集合しにくい。
 - 3) 伝統的に教員が教科外まで指導する考えが少なく、社会もそれを期待しない。
 - 4) クラブ活動などを行なう施設は学校ではなく社会(自治体・企業・組合・市民学校など)が分担しており、そこには通常ボランティアを含めた、資格を有する専門の指導者がいる。(事情は東独も同様)

中等教育における特別活動の方法に関する一考察

- (5) レイノルズ「スカウト運動」ボーイスカウト日本連盟誌, 1974, P. 3
- (6) 同上, P. 20~21
- (7) ボーイスカウト日本連盟「日本ボーイスカウト運動史」1973, P. 12~13
- (8) 例えばTimes Educational Supplement(1921, 8, 13) にPowellがロンドンの学校にScouting を呼びかけている記事がみられる。
- (9) 前掲「スカウト運動」P. 203
- (10) 前掲「日本ボーイスカウト運動史」P. 71
- (11) このちかいはイギリス本部の規約集に準じている。Scouts版“The Policy, Organisation and Rules” 1989, P. 6~13
- (12) ボーイスカウト日本連盟「シニアスカウトハンドブック」1989, P. 6~13
- (13) Powell 自身の宗教心がその原点であることは言うまでもない。
- (14) イギリスScout Associationによる“Scouting” 11月号, 1983, P. 56
- (15) 「改訂中学校学習指導要領の展開・特別活動編」明治図書, 1989, P. 159 以下同書からの引用は本文中()で箇所を示す。
- (16) Wandervogel については歴史学の側からの研究が少数ながらある。「ドイツ青年運動」W・ラカー, 1985人文書院, 「歴史のなかの若者たち④」上山安敏 1986, 三省堂

Zusammenfassung

Die Gruppentätigkeit der Schüler richtig zu führen, es ist heute so wichtiger in der komplizierten Sozial-situation. Zwei Jugendbewegungen, Wandervogel und Boy Scouts, geben uns vielmehr über dem Problem wichtige Andeutungen.